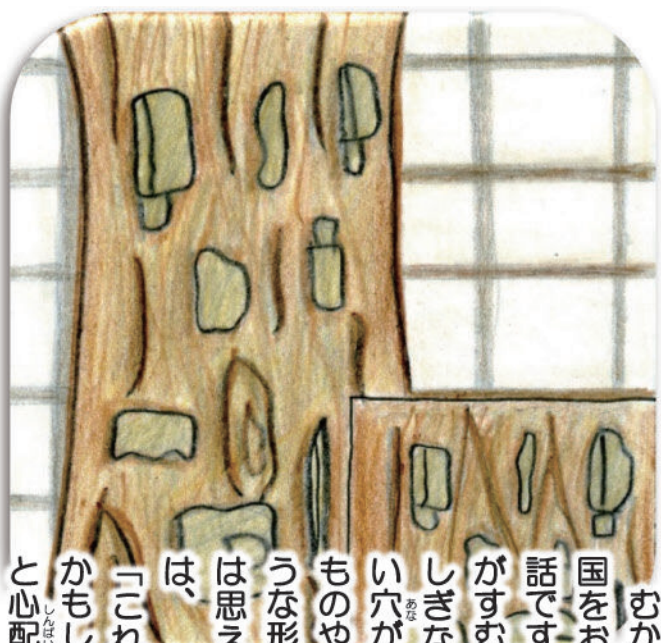


『八品の道具』

～貝塚に伝わる民話～



① むかしむかし、欽明天皇が国をおさめていたころのお話です。ある日のこと、天皇がすむ立派な宮殿の柱に、ふしぎな形をした八つの虫くい穴が見つかりました。丸いものや細長いもの、三角のような形まであり、ただの穴とは思えませんでした。天皇は、

「これはなにか良くない印かもしれない。」と心配になり、すぐに陰陽師をよびました。



② 陰陽師は柱をじっと見つめ、しずかに言いました。「これはただの穴ではありません。くしを作るための八つの道具の形になっています。この形を絵にうつし、屋根にかけておきなさい。やがてその絵は空に舞い上がるでしょう。そして、舞い降りた先でくし作りを広め、神社をたて、くしをまつるのです。」

人びとはおどろき、天皇も不思議に思いましたが、言うとおりに絵を屋根にかけました。すると、黒い鳥が空から舞いおり、その絵をくわえると、西の空へと飛び去り見えなくなっていました。

③ 天皇の家来たちは、その鳥をおいにかけて、西へとすすみました。山をこえ、谷をこえ、けわしい道をすすむと、葦の生えるぬま地にたどり着きました。すると、さらに西の方からうとうとひびく波の音が聞こえてきました。家来たちはぬま地に入り、西へとすすみました。



④ やっとの思いでぬま地をぬけると、そこには海が広がっていました。そしてまぶしい光がさしこみ、砂浜に絵がきらきらと輝いて置かれていました。家来たちはおどろいて、村人たちに語りかけました。

「この場所こそ、陰陽師が言っていた場所にちがいない。こゝでくしを作り、神社をたてて、くしをまつってください。」

村人たちは力を合わせ、心をこめて神社をたてはじめました。



⑤ その日をさかいに、沢村を中心にくし作りがさかんになりました。美しいつげの木で作られたくしは、村の人々の生活を支え、やがて日本全国に知られるようになりました。

「くしについて『八品の道具』と『八品神社』の伝説が生まれ、今も人びとに語りつがれているのです。」

欽明天皇…古墳時代の天皇（539～571年）
陰陽師…朝廷に仕える官僚の1つ。未来を占いました。
沢村…今の貝塚市澤